

読解方略の教材化に向けた基礎分析

An Analysis towards Making Teaching Materials for Reading Strategies

永井 亮祐^{*1}, 林 佑樹^{*2}, 瀬田 和久^{*2}
 Ryosuke NAGAI^{*1}, Yuki HAYASHI^{*2}, Kazuhisa SETA^{*2}

^{*1}大阪府立大学大学院理学系研究科

^{*1}Graduate School of Science, Osaka Prefecture University

^{*2}大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科

^{*2}Graduate School of Humanities and Sustainable System Sciences, Osaka Prefecture University

Email: nagai@ksm.kis.osakafu-u.ac.jp

あらまし：文章理解を促進するために、文章のジャンルや構造に応じた読み方（読解方略）を適用することが求められる。読解方略を習得するためには読み手自ら適用訓練を行う必要がある。しかし、読解方略そのものの習得を目的とした教材の検討は少ない。本研究では読解方略の教材化に向けて、学術論文において既存の読解方略がどのように適用されているかを検討する初期実験を行った。本稿では、論文執筆経験の有無に着目して分析した結果を報告する。

キーワード：読解方略，教材化，表出化，方略習得

1. はじめに

文章を読解する際に、読み手は様々な読み方の工夫を行っている。例えば、「これから何について読もうとしているのかを考える」や「読んだ内容で疑問に思ったことについて考える」などである。このような読み方の工夫を読解方略と呼び、読み手は文章のジャンルや構造に応じて方略を適用している。先行研究により、熟達した読み手ほど、多くの方略を柔軟に組合せて適用していることが明らかにされており⁽¹⁾、内容を深く理解するための読解方略形成の重要性が再認識されている。

読解方略を習得するためには、学習者は指導者に教授された方略を文章に適用し、訓練を繰り返し行うことが必要である。しかし、読解方略は暗黙的に形成、適用されるため、単に学習者に方略の使い方を説明しただけでは、学習者の方略習得につながることは限らない⁽²⁾。また、方略適用を促すような訓練用教材の検討は少ない。

本研究では読解方略の習得を目的とした教材のあり方を明らかにする基礎検討として、研究論文に対する読解活動を対象とし、執筆経験の有る読み手（経験者）と経験のない読み手（初学者）に観測される方略適用箇所の違いについて報告する。

2. 教材化に向けたアプローチ

本研究では、まず読み手が普段どのように方略を適用しようとしているのか捉えるために、既存の読解方略⁽²⁾を参考に、方略を提示しながら文章読解中に自分の行っている読み方を表出化できる仕組みを実現する。

さらに、論文執筆経験の有無と方略適用の関係性に着目して読み手の方略適用の傾向を、論文読解課題を用いて検討する。研究活動において論文の読み書きは、研究者に陽に求められる取り組みである。



図 1：読解方略の表出化例

自身の主張の根拠を裏付けることを目的に関連研究の論文を読み進め、また自身の研究成果を論理的で整合性の取れた文章として明文化することが求められる。文章産出研究の知見によれば、熟達した書き手ほど読み手を意識して文章を書いており、推敲活動においても、読み手の立場に立った読み直しや書き直しが文章の質に影響を与えているとされている⁽³⁾。このことから、文章を読む際に個々の読み手の執筆経験の有無により、読み方に特徴的な違いが現れるのではないかと仮説を立てて分析を試みる。

3. 方略表出化機能の実現

読解方略の表出化を実現するために、Microsoft Office Word の VBA (Visual Basic for Applications) を用いて方略表出化を行うマクロを作成した。各マクロは、先行研究で作成された読解方略表⁽⁴⁾を基に、「プランニング・モニタリング・ドキュメント作法利用・選択的注意・命題理解・内容理解・知識形成」の 7 つの方略カテゴリに分類されている。さらに、各方略は「むずかしいところは繰り返して読む」、「わからなかったところに印をつける」など具体的な方略に分類される。

具体的な操作として学習者は、方略を適用しよう

と考えている文章の箇所をドラッグして選択し、該当する読解方略ボタンを押すことで、その方略が記録される。図1は、タイトルを範囲選択して方略カテゴリの中から「プランニング方略」の「どういう読み方をすればよく分かるかを考える」を選択し、自由記述コメントとして「タイトルから、この文章ではどういう内容が説明されていくのかを予想する」を表出化した例である。読解終了後は、マクロにより、読解方略の種類、適用箇所、および適用時間を集計することができる。

4. 初期実験

4.1 実験設定

作成したマクロを組み込んだ Word を用いて初期実験を行った。被験者は教員2名、大学院生7名、大学生14名から構成される。読解対象となる課題文章は、教育システム情報に関する過去の全国大会予稿集から無作為に1つを選択した。ページ数は2枚、文字数は3,000字程度である。実験前に、被験者に読解方略表を配布して一読してもらい、実験時間は30分程度を目安にし、読解時の注意として読み飛ばしをせずに、前から順番に読み進めるように指示を与えた。

実験中は、被験者は2つのディスプレイ（一方に読解方略表、もう一方に課題文章を表示）を用いて、内容理解を目的に読解方略の表出化を行った。読解終了後は、教材の内容と表出化機能に関するアンケートを実施した。

4.2 実験結果

被験者23名から収集したデータを論文執筆経験（学会で指定された原稿・卒業論文・修士論文を執筆した経験）の有無から分析を行った。執筆経験群（経験者）は12名、執筆未経験群（初学者）は11名である。

全体を通して全方略適用数中に各方略が占める割合および章・節ごとに方略適用した人数の割合を、二群（経験者と初学者）に分けて集計した結果を、図2、図3に示す。図2より、経験群と未経験が適用した各方略の割合では顕著な差異を確認できなかった。一方で、章と節毎の方略適用人数の割合を表す図3では、「タイトル・あらまし（概要）・1章・2章・4章（まとめ）」に違いがあることが読み取れる。特に違いが顕著に見られるタイトル部では、経験者はプランニング・選択的注意方略を適用し、内容の推測・疑問・文章のつながりに関してコメントする傾向があることを確認した。タイトル・あらましは、文章内容が集約され、論文の核を成すキーワードが短文に込められている箇所である。この結果は、初学者は「タイトル」や「あらまし」に記されている著者らの主張や論文の骨子への意識が相対的に弱い状態で読み進める傾向があると考えられ、熟達度が低い読み手にはこの意識を促す必要があると言える。

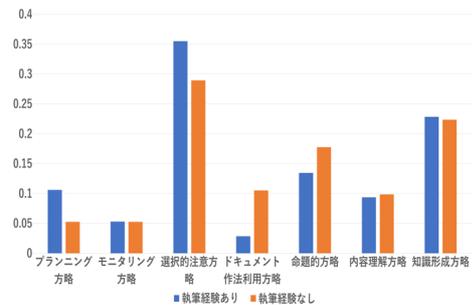


図2：各方略の適用割合

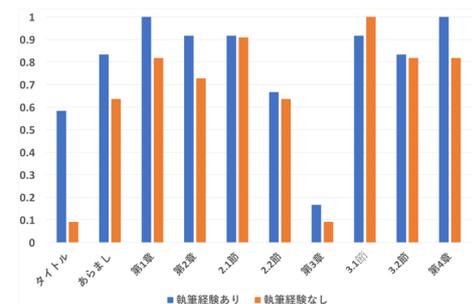


図3：章・節毎の方略適用人数の割合

意識が高い経験群の中には、まとめを読んだ後に、もう一度タイトルに戻って、読んだ内容とタイトルの整合性を確かめるコメントが確認された。

5. まとめ

読解方略の教材化に向けた検討を行うために方略表出化機能を実現し、論文を課題に初期実験を行った。実験結果から、部分的ではあるが、論文執筆の違いが経験者と初学者の読解方略適用の違いとして表れることが示唆された。

学習者個々の読解方略の熟達度を測定することは、一般にはコストが高く必ずしも容易ではない。論文執筆経験から読解方略の熟達度をある程度捉えることができれば、方略形成を目的とした適用的な教材作成につながると考えられる。より具体的には、論文執筆経験と方略適用の傾向をさらに掘り下げて分析し、論文執筆の経験度に則して方略適用を促す仕組みなどを検討していくことが今後の課題として挙げられる。

参考文献

- (1) 大村彰道 監修, 秋田喜代美・久野雅樹 編集: 文章理解の心理学 認知、発達、教育の広がりの中で, 北大路書房 (2001)
- (2) 犬塚美輪: 読解方略の指導, 教育心理学年報, Vol.52, pp.162-167 (2013)
- (3) Flower, L. S., Hayes, J. R., Cary, L., Schriver, K., & Stratman, J.: Detection, diagnosis, and the strategies of revision. *College Composition and Communication*, Vol.37, pp.16-55 (1986)
- (4) 井関, 海保: 読み方略についての包括的尺度の作成とその有効性の吟味, 日本読書学会, Vol.45, No.1, pp.1-9 (2001)